

国語・総合 複式全学級	縦割り班活動「きょうりよくプロジェクト」 ～ものがたりのよみきかせにちょうせんしよう！～	西村 充司 坂本 桂 辻本 和孝
----------------	---	------------------------

1. 単元設定の理由

(1) 本実践の主張点

①複式全体での縦割り活動「きょうりよくプロジェクト」を設定した理由

～表現力、高学年のリーダー性、異学年の集団での主体性・共同性・協同性、つくる～

昨年度までの複式全体活動を振り返ると、毎週木曜日朝の複式集会においても、6年生が司会進行（3学期は5年生）するとはいえ、おにごっこやボール遊びなどゲーム的な内容がほとんどで、はじめの説明、最後に感想発表の指名をする程度の役割であり、高学年を中心とした主体的な活動とは決していえなかった。したがって、互いにその名前すらわからないままに学校生活を送り、集会での司会・進行もぎこちないままに終わっていく現実にあった。

また、学級の中では積極的に発言し、自主的に学びをつくっていきつつある子どもたちであっても、複式全体の中では活動の感想などの発言も少なかった。大きな集団の中でも、自分の考えをもちそれを伝えていけるだけの真なる積極性や勇気、自己表現力を育みたいと考えた。

また、県内外の小規模校がそうであるように、学年・学級の枠をこえた縦のつながりを重視することで、子どもたち相互の関係を密にし、複式での学校生活では信頼感・安心感をもって過ごせるようにと願い、「ふくしきタイム」を充実させることとした。内容的には、「表現力を高める」「高学年のリーダー性を育む」「異学年のかかわりでの主体性・共同性・協同性を養う」といったねらいと、「つくる」をキーワードに、毎週火曜日の1時間目をその時間として取り組んだ。

②年間計画 ～「表現」と「つくる」の「意味と内容」がひろがる学びの創造～

年間計画の概要は以下の通りである。

1学期 11(+課外1)時間			2学期 13(+課外3)時間			3学期 9時間			
5	2	オリエンテーション	8	31朝	1学期の振り返り	1	16	各チームの劇	
	9	詩『あいうえお』		9	5朝		2学期の見通し	23	各チームの劇
	16	詩『あいうえお』			12朝		2学期の見通し	30	各チームの劇
	23	各チームの詩1	10	26	各チームの物語作品	2	6	各チームの劇	
	30	各チームの詩1		3	各チームの物語		13	各チームの劇	
6	6	各チームの詩1		10	各チームの物語		20	各チームの劇	
	13	各チームの詩1		17	各チームの物語		22	全校向け発表会	
	20	各チームの詩2		24	各チームの物語	3	6	活動をふり返って	
	23	各チームの詩2		28	各チームの物語		13	活動をふり返って	
7	4	各チームの詩2	11	7	各チームの物語		実際、4月当初の計画では、2学期に物語を2本計画していたが、9月に諸行事が重なることや、しっかりと話し合いを経て表現できるようにとの願いから、修正した。3学期の劇は5・6年生が中心で進め、低・中学年は友情出演の形とする。		
	11	発表会に向けて		14	保護者・教育実習生向け発表会				
	13	保護者向け発表会		21	各チームの修正				
				28	各チームの修正				
			12	5	幼稚園児向け発表会				
				12	2学期を振り返って				
				19	3学期の見通し				

各時間や単元、学期ごとに子どもの様子を評価し、修正していった。

詩の群読から出発し、2学期には物語の群読・役割読み、そして3学期には劇へと、内容的にひろげていきたいと計画した。短い詩では分担しながらも共に声を合わせて読む活動が中心となり、物語・劇へと長文になるにつれ、一人一人の活躍の場が増えてくる。また、具体的な表現においては、子どもたち自身の音声で「つくる」を常に中心にすえながら、少しずつ身体での表現や効果音などへと「つくる」ための工夫の選択肢を広げていったし、また既存の詩や物語から、自分たちで創作する劇へと、「つくる」の範囲をひろげ、レベルを上げていった。

こうした継続的な活動により、個人と個人、集団と集団、そして個人と集団、あるいはもっと全体のつながりをしっかりしたものにしていければと願った。

これらの期待が実現するとき、本縦割り班活動における「意味と内容」がひろがる学びが創造できたといえよう。

③ 1学期の活動から ～「高学年を中心とした協力性」と「表現力の高まり」を子どもが実感～

1～3班は、各学年男女1名ずつの計12名。4班だけは2年生男子がいない11名のメンバーで、1学期には、「詩の群読」(第1～3弾)に取り組んだ。

第1弾では、指導者で決めた詩『あいうえお』(新井竹子作)を、複式のメンバー全員で、また、上記の4つに分かれて班ごとに、群読に取り組んだ。ねらい通り、1年生も含めて明るく元気よく発声できたし、詩の内容に即した簡単な身体表現も見られた。母音を大切にし、口をはっきり大きく動かして発声していくための、ウォーミングアップの詩としての位置づけもできた。

第2弾からは、リーダーである6年生がメンバーの実態や詩の工夫点なども考慮しながらまず決め、後にそれぞれの班員の承認も得て決定された詩での群読に取り組んだ。自分たちで選んだ詩での取り組みでは、第1弾以上に高学年の児童を中心とした主体的な活動場面が多く見られた。

第3弾も、子どもたちが決定した詩で取り組んだ。第2弾との違いは、発表会を行う相手が自分たちの保護者であり、子どもたち同士の内輪の発表から、外向けのそれへと聞き手が外にひろがる点であった。それまでは自分たちの班の読みの工夫とその発表をより良いものにするだけだけに力を注いできた。しかしここでは、どの班も自分たちの群読を詩の内容に沿うだけの発表に高められるよう努力することはもちろん、複式全体として発表会を成功させようという思いで取り組むことができた。そんな中、主体的に他の班と聞き合いして相互にアドバイスを送り合うなど、班の垣根を越えた助け合いの姿が見られた。また、各班とも、高学年の指導力は着実に上がり、堂々とした司会・進行に加え、低学年の子どもたちへの具体的な支援の場を多く持てるようになった。さらに、低学年の子どもたちにも発言の意欲や機会が増し、それが少しずつではあるが全体の場でも生かしてもらえるようになった。

保護者向けの発表会は、敢えて体育館の舞台を発表の場にしたが、練習が生んだ自信と、仲間との共同が支える安心によって、堂々とできた。そんな手応えからか、2学期の初めに行った1学期の振り返りでは、6年生のリーダーを中心とした班の協力と、実際の表現力が高まったことを実感としている子どもの声を、いずれの班からも聞くことができた。また、この協力体制をさらに確かなものにしていくためにも、引き続きこのメンバーで取り組んでいくことも決定した。

④ 2学期＝本単元 ～共同から協同へ＝全体の協力・協調から全体・個人の主体性・表現力の高まりへ～

物語ということで文章が長くなる分、当然個人で音読する部分が増える。1学期の詩の群読では数人あるいは全員で声を合わせて読む部分を中心であり、共同的な活動であった。2学期は、役割を分担し個々人がそれを果たしながら1つのものを作り上げていく、協同的な取り組みへと姿を変えるものと期待した。当然そこには班員同士の助言があり、具体的な範読もあり、そうして個の表現力の高まりをも期待できる。また、複数で声を合わせるのとは違い、個人の責任も大きくなる。さらなる主体性が発揮されるものと願った。

こうした願いのもと、9月末に2学期の活動の見通しについて話し合った。その結果、保護者の方への発表は最終目標でなく、さらに質を高めるための位置づけとし、そこでのアドバイスを生かしてさらに向上させ、最終は幼稚園児や教生先生に対して発表しようという計画になった。自分たちの発表によって楽しませてあげたいとの発想は、子どもたちの主体性と自信の表れである。この目標に向け、相手意識・目的意識をしっかりもちながら取り組んでいった。

(2) 教科提案とのかかわり【個と個がつながる主体的な複式の学び～認め合うかかわりを大切に～】

1学期の活動は、複式の研究テーマに照らして換言すると、第2弾が小さい集団の中での個人と個人とのつながりに主眼をおいていたのに対し、第3弾は、もちろん個人個人のつながりが基礎としてありながらも、集団と集団のつながり、複式全体のつながりを大切にしたいものである。また、これまでの第1弾、第2弾におけるそれぞれの班の工夫と発表を参考にしながら、第3弾では、それぞれの班でいいと思ったところを互いに取り込み合う場面が見られた。そこに認め合うかかわりを大切にしている子どもの姿があった。

複式のめざす子ども像から言えば、上は、【かかわりを大切に、互いのすてきさを認め合い、生かし合う子ども】たちへの変容の姿である。もう一つの【自己を拓き積極的に豊かに表現し合う子ども】については、今後例えば発表の相手がひろがる中でも、思い切って自己を表現する、しかも豊かに表現する、さらには個人での表現の場においても勢いや積極性が発揮できる、そんな

成長する子どもの姿を認められればと願った。話し合いの中でこれまで発言の機会がもてなかった子どもがその機会をもてるようになることなどもめざす姿ではあるが、やはり本番でも力が発揮できてこそめざす子ども像を想定した。

2. 単元目標

- ・学年に応じた役割を担うことができる。
- ・1学期の経験と、みんなでの教材文の読み取りを生かし、また相手意識をもちながら、工夫して読むことができる。
- ・互いにアドバイスを出し合ったり他の班の良さを取り入れたりしながら、協力して読みを高めることができる。
- ・複式全体での発表会を成功させようと、全員で心と力を合わせて取り組むことができる。

3. 単元計画 (全16時間 本時=全体8/16, 第2次5/7)

第1次 1~3時	1学期の活動を振り返り、成果や課題を整理した上で、2学期の取り組みの見通しをもつ。
第2次 4~10時	班ごとに作品の内容を読み取り、声に出して読む練習を行う。
第3次 11~14時	他者への発表という機会を通して、自分達の表現の質を高める。
第4次 15・16時	2学期の活動を振り返り、成果や課題を整理した上で、3学期の取り組みの見通しをもつ。

4. 単元の考察

(1) 主張点とかかわって

前にも触れた2学期の見通しについての話し合いの際、具体的には次の様な意見が出された。

- ・「1学期はお母さんが中心だったから、2学期はお父さんに来てもらいたい。」
- ・「1学期と同じ人に来てもらったほうが、自分たちの成長を見てもらえる。」
- ・「そんなに絞らず、おじいちゃんやおばあちゃん、兄弟など、家族のみんなに来てもらいたい。」
- ・「幼稚園の人にも聞かせてあげたい。」
- ・「幼稚園の人だったら、集中して聞いてくれないかもしれない。」
- ・「おうちの人だったらアドバイスをくれるけど、幼稚園の人だったらもらえない。」
- ・「幼稚園の人には、アドバイスをもらうためではなくて、聞いてもらって喜んでもらいたい。」
- ・「おうちの人からアドバイスをもらって、最後に幼稚園の人に発表したい。」
- ・「校長先生とか副校長先生とか教頭先生にも聞いてもらいたい。いいアドバイスもくれる。」
- ・「教生先生にも聞いてほしい。」
- ・「おうちの人に発表するときに、先生たちにも来てもらったらいい。」
- ・「単式のみんなにも」
- ・「そんなにたくさんの人の前ではできないし、集中してくれない。」
- ・「聞きたい人にだけ聞いてもらおう。」……

これらの意見から、11月の日曜参観では、【複式親子ふれあいDAY】の名のもと、午前中には市内の浪早ビーチで縦割り対抗の親子つり大会を、午後には学校に戻って読み聞かせを行った。保護者の皆さんからは、「もっとゆっくり読まないと内容が分からない。」「前を見ながら話さないと伝わらない。」など、意義を踏まえた説得力のあるアドバイスをもらえた。子どもたちだけにとどまらず、保護者の方を含めての、まさに【複式全体でのきょうりよくプロジェクト】となった。さらに、子どもたちの願い通りお父さん方の参加も多く、また教育実習の先生も何名か駆けつけてくれ、自分達の取り組みの成果をさらにたくさんの方に感じてもらえる絶好の機会となった。

そうして、そこでのアドバイスも生かし、さらに実際の場合や相手を想定した練習を積み、12月の中旬には近くの岡山幼稚園で本番となる読み聞かせを行った。自分たちの発表により楽しませてあげたいという願いの通り、年長の子もたちは目を輝かせ真剣そのもので聞き入ってくれた。内容もよく伝わったようで、園児からはお話の内容にかかわる具体的な感想も出された。縦割り班のメンバーで協力し、相手意識・目的意識をもちながら取り組んできた練習の成果がしつかり出せ、当日参加した46人の子どもたち一人一人の表情に充実感・達成感が見て取れた。

(2) 互いのまなざしが響き合う姿は

10月24日、研究会の前時における2班の活動を例に挙げる。

6F4：今日はこの前に出した登場人物がどんな人なのかを考えます。将軍はどうですか？

3F2：67ページのはじめて、将軍はアヒルを追い出そうとしている。

6F4：それってどんな性格かを考えることはできるけど、じゃあ、どんな性格か言える？

3F2：こわい人。

4F6：大砲の中のアヒルを追い出そうとしているけど、その前は優しい言葉をかけているから、本当はやさしい人。

6F2：みんな76ページみてよ。「アヒルのたまごがかえったぞ。」のところで、やさしさがわかるやろ。みんないい？

6F4：じゃあ次、兵隊は？

C：「せっかくペンキをぬったところをつぶしのはもったいない」のところで、少し欲張りだけど、本当はやさしい人。

6F2：次もう市長さんへいくよ。市長さん出てくるページ開いて。

(と言いながら1年生の支援に入り、中学年の子どもの挙手を見ながら)

3・4年生、よく言ってくれてるから、ちょっと待って。

(と言いながら、1年生と一緒に文を読んでやり考えさせる。)

以下、市長やアヒルについても考える。

指導者が不在の間、読むときに気持ちを出しやすいようにと、市長・兵隊・将軍の3人の心情(特におこっている強さ)を折れ線グラフで表し始めていた。

6年生の2人は、中学年で学習や、6年生のはじめ『カレーライス』の学習で主人公のイライラ度を折れ線で表した経験があり、それを生かしての発想であった。しかも3人を同時に扱うことで、比較しながら考えていこうというものである。中・低学年児にとっては学び方を学ぶ機会ともなった。

また、いつも通り6年生2人のTTぶりはさえており、特に低学年への配慮が行き届いた。結果だけを求めど



ん進めるのではなく、1・2年生も含めてみんなで作り上げていこうとする思いの表れであり、発言を待たされる児童にとっても、発言の積極性を認められてのものであり、あたたかいまなざしで1年生を支援する6年生の頼もしい姿を見守っていた。

5. 成果と課題

今回、各班が読み聞かせに取り組んだ作品は、次の通りである。

1班：『ソメコとオニ』(斎藤隆介)

2班：『大砲の中のアヒル』(ジョイ=コウレイ)

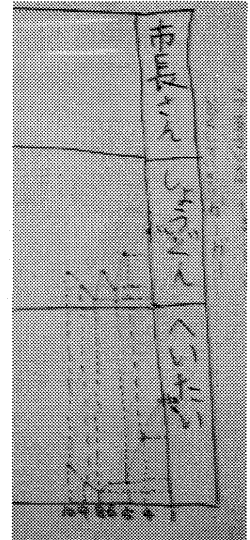
3班：『手ぶくろを買いに』(新美南吉)

4班：『注文の多い料理店』(宮沢賢治)

これらは、幼稚園児という相手意識を重視したとき、内容的にはやや高度であるとも考えられる。一方で、複式の子どもたち一人一人にとっての学びという視点からは、ある程度は読みごたえのある作品でありたい。1～6年生という発達段階差の大きな縦割りにおける学習活動においては、相手意識や目的意識をも含め、学習課題の置き方や活動内容の取捨選択が特に重要である。

これまでの取り組みから、高学年のリーダーシップを中心とした主体性や共同性・協同性は確かな成果を実感できた。おそらくはこの後に取り組む「劇」においても、自己を拓き積極的に豊かに表現し合う子どもとして、手応えを感じ得る活動になるだろうと期待感でいっぱいである。

表現力の高まりという目的についても、全体としては一定の成果を感じる。しかし、47人の一人一人に目を向けたとき、例えば1F0くんが16時間という学習時間に見合うだけの高まりを実感できているかと言えば、必ずしもそうは言い切れない。複式のメンバーとの協力の楽しさや主体性・協力性の伸びなどと同様に、低学年から高学年の子どもたち一人一人にとって、学びとしても手応えや充実感がもてる取り組みにしていきたい。そのためには、先にも示した学習課題や内容、またその期間、あるいは人数も含めた班の構成などに、工夫・改善の余地がある。



十月五日
二はん
2F3
今日は、話し合、たことであつた、た
んでんかけおこ、てたりだんだけう
れしいかとかをべんせうしたの、でし
ようごんのことやへいたいこのことか
かりました。へいたいしょうごんに
市長さんとアヒルとかがかんたんにと
たらだん女たちとかなにかもわか
りました。
今、赤だんらくめまでべんせうし
ているから、ぎは、二だんらく目から
します。
おこ、ているのかどんだけとかのや
つおもしろか、たのでも、とやりの
つぎのまようカプロジクトがたのし
みだからたのしみます。